短大十三回卒業　吹井　ふじ子

出会いあればこそ!!

第九号の特別寄稿の杉山菊枝さんの懐かしい文章と写真を楽しく読ませていただいてから、早三年、此度はお鉢が私に回ってきた。彼女の「今年は初秋に北海道に移住した友を訪ねることに……」の続きからこの便りを綴ることにしよう。

全く思いがけない旅となった。

各地より九月三日、千歳空港へ七名、その後伊達紋別で一名合流して鈴木邦子さん宅の手作りログハウスに泊めていただき楽しいスタートとなった。なにしろ鈴木家の庭はお花がいっぱい、そして洞爺湖はすぐ近く。景色よし。自家製野菜や果物に、初秋刀魚ということなしのスタート。夜台風接近。ログハウスはびくともせず、翌朝のテレビでトラックが横転しているのを見てビックリ！

翌日九月四日朝、九州から参加一名と合流。総勢十名の再会である。「同期会イン山梨」以来の「茜会」に期待は膨らんだ。この北海道ツアーを企画してくださった鈴木邦子・龍夫ご夫妻（ちなみにご主人は火山マイスターの正式ガイドの有資格者）に昭和新山・洞爺湖を案内いただくという幸運だ。

洞爺湖の遊覧船で中島に行く計画は台風の影響で風が強く取りやめになってしまった。

翌五日はニセコ羊蹄山の大地巡りでサイロ展望台の美しい自然を堪能した。また何か国文科らしい思い出になる所をと「有島武郎記念館」を訪問。

さて最終日二〇一八年九月六日午前三時六分の地震発生に遭遇。本来なら小樽経由で帰途に就くはずの日だったが、後に「北海道胆振東部地震」と呼ばれる震度七の大地震である。

未曾有のまったく経験のないひどいものだった。全道が停電する事態に遭遇。幸いメンバーの中に経

験豊富な強者がいて、すぐ夜中から手を打ってくれた。が、停電はこたえた。スマホの電源が切れて連絡不能に。その後交通網がすべてストップ。そこでもう一つハプニング。九州からのタヅさんの薬が切れていることが分かり急いで連絡するもどこも開いていない。コンビニや薬屋、医院も機能していないが、何とか都合が付き、みんなで安堵した。

「有志は時間があるので倶知安駅まで様子見に歩いてみたが、たどり着けなかった」と、後から聞いて驚いた。この夜は不安が続いた。

ホテルの方々の協力で、もう一泊出来る事になったが、これまた従業員も少ない中で本当に大きなおにぎりを作ってくださったのもありがたかった。

こんな中で七日はとてもJR、飛行場開通の目途も立たず船も満杯。万策尽きかけた時に祥子さんの発案で室蘭―宮古のカーフェリーのルートが見つかった。これで北海道から本州に戻る手筈が整い、紐紗子さんの素早い対応で予約が取れ、小型バスで室蘭港まで移動。その間は殆ど未だ停電や通行不能が多く、コンビニなども営業していないところばかりだった。

カーフェリーはこの年の六月二十二日に就航したばかりで新しく気持ちの良いものであった。船名が「シルバークイーン」というので、やっと帰りの目途が立ったみんなは気持ちも余裕が出たのか、大笑いである。「きっと、私達を乗せるべく縁があったのよ……」などと勝手に言い合った。

室蘭を夜八時出港。翌八日の朝六時に宮古港に着いた。これまでの二日間の不自由な食事を思えば、宮古の朝の市場で食べた海鮮丼は格別なものであった。きっといつまでも忘れないであろう。

タヅさんは宮古から花巻空港へ、後のみんなは、バスで盛岡へ出て、東北新幹線、東海道新幹線、JRでまっしぐらに帰宅した。

心に残る旅とは素晴らしい数々の出会いあればこそ！邦子さんには最終回復までの期間、どんなに不

安、不自由が続いたことか。感謝しかない。

この旅の経験は自然の力の脅威、台風、火山、地震などが身近に起こることは少ないに越したことはないが、強く心に残った旅には違いない。

それもまた出会いであるゆえ、短大卒業後五十数年余、最も印象深く心に残る旅となった。

この旅はまた、私の趣味の句作にも残したいと思う。そしてまた北海道という悠久の地を再訪できることを、新しい出会いの増えることを、コロナ禍であるにも関わらず、心の抽斗は、出会いからと思うこの頃である。拙いが貴重な体験の句を記して擱筆しよう。

秋高し木目の美しきログハウス
溶岩の池覆いつくせる草の花
洞爺湖見ゆる軒につるして唐辛子
昨夜の野分や災害の国にをり
七竈どこまでつづくここは蝦夷
秋時雨挿して置き去る山の杖
秋高し昭和新山右に見て
蝦夷富士の紺極まれり鷹渡る
もつるるも別れも風の花芒
沈黙といふ会話あり曼珠沙華
またもとの二人にもどる秋桜
桐一葉誰かと語りたき日なり

有島武郎記念館にて

短大十四回卒業　大久保三樹子

短大時代に培ったこと

コロナ禍の中、皆様如何お過ごしでしょうか。私は、やりたいことがいっぱいあるせいか時間が過ぎるのが速く感じます。

さて、現在の私の生活を彩っていることの多くが、短大時代に培ったことであると思い、短大時代に感謝しています。

今、障害をもつ方の家庭教師、マンドリンの演奏、朗読の会の活動などをしています。

私は結婚して御殿場に住んでいるので、毎日素晴らしい富士山を眺めています。

実家は隣の町小山町で、神奈川県境にあります。小さい頃から神奈川県へ行っていたので、ごく自然に神奈川県の小学校の教員になり、三十数年、車で二～三十分ほどの学校へ通っていました。

短大二年の九月に神奈川県の教員採用試験があり、中間試験もありました。それに加え、岸先生の中世文学と吉田先生の近代文学の演習が名簿の前と後ろから始まり、旧姓「田代」はまん中へんで、同時期になりそうでした。その上、中間試験の間に一回だけある日曜日、その日が採用試験の日だったのです。何というスケジュール!!よく乗り越えたものだ、よく採用試験に合格したものだと、我ながら感心します。合格したからその後の私の人生が開けていったのです。

さて、夢中で仕事をしていた三十代半ば、一人一人の成長に合わせた特別支援学級の教育に関心を持ち、受け持ちました。一人一人の特性を見極め、良さを引き出すよう努め、二十数年担任しました。自閉症のお子さんの独得な行動が変化し、人との関係がもてるようになった姿を見て、嬉しかったです。

退職して、障害をもつ二人の中学生の家庭教師を

頼まれ、十三年続けています。教材はほとんど自作です。おもちゃ屋、本屋など巡って資料を探します。自傷行為など対処が難しい時もありますが、少しでも進歩があった時の笑顔は素晴らしく、お母さんと手を取り合って喜びます。

短大の時はマンドリンの活動に夢中でした。退職したら再開したいと思っていたら、地元に小さなクラブがあったので入れてもらいました。最初は指が動きませんでしたが、次第に皆に合わせられるようになり、演奏会に出たり、老人施設へ訪問演奏に行ったりしています。リズムに合わせて楽しんでくれる姿を見て、私達も嬉しくなります。

でも、今はコロナ禍のため中止です。それで部内演奏会をすることになり、練習中です。

朗読の会は、読む本を選び、読みの練習をして、月一回老人施設で朗読します。最後に手遊び歌や歌を歌ったりしていましたが、こちらの活動も今はお休みです。

夫は野菜を作っていて、私は収穫の係りです。楽しみですが、草取りが大変です。腰痛があるので、予防のため自彊術（きょう）体操の教室に通ったり、ウオーキングをしています。

どの活動も車を使うので、事故を起こさないように気をつけて、長く活動したいです。

そして、主人と二人で健康に気をつけ、元気に過ごしていきたいと願っています。

老人施設への訪問演奏　司会をすることもあります

短大十五回卒業　佐藤良子

小野田温子さんを偲んで

小野田温子さんを憶い出してみよう。

短大で初めて知りあった頃、彼女は小柄で控えめに笑っている、そんな印象だった。

私が献血の話しをすると、彼女は「私はできないんだ。だって三十九キロしかないんだもの。」と言った。たしかに細身だった。

でも彼女はがんばりやさん。休日に中国語を教えるため、わざわざ東京からおいでくださる竹田復先生の講義を熱心に受けていた。

二年生になってわりと早い時期、小野田さんに声をかけ、史学の山下先生に申し出て、清水の静甲いすゞ自動車に就職した。

奇しくも、ほんとうに奇しくも、彼女の出身校、清水東高校のすぐそば、そしてご実家から徒歩十分程だった。

誘った私はといえば、バスを乗り継いで一時間。彼女が短大に通うのに要する時間と、私が通勤に要した時間が、まったく逆転したわけである。

同じ総務部に配属となり、彼女は、平馬氏という、私の友人の兄と調査・統計方面の仕事についていた。

端正な字を書く人だった。

すぐ隣に経理部。そこに未来のご主人となられる小野田敦さんがいらしたのだ。

エッ？ときき返すほど、名前の音がほぼいっしょ。おつきあい始まったのなんかぜんぜん知らなかったな。

よくよく考えてみると、私がキューピッドということになりますよね。……エヘヘ

三年半楽しく過しました。

その後私は現在まで千葉に住み、短大のお役は小野田さんに全面おんぶ、いつもありがとう、という

だけで……。

通知をいただき、総会には時折出て、古沢先生、藤田先生、諸先生方とおあいし、懐しい時を過した。

文学散歩は、忍者のような店主の案内で山野を歩き、東海道五十三次の絵に名高いとろろ汁をいただいたこと。

また、ラフカディオハーンの焼津での足跡をたどったりという散歩が思い出される。

あとできいたことだが、七月に体調すぐれず入院。あっという間の去り方だった。

でもお花を飾りに行った時、膵臓がんだったときき納得。

苦しむ時間が短くてよかった、なんてご主人には言えませんよね。

誠実な方でした。

全国にいらっしゃる皆様、時には学友の顔・声・当時の様子を思い起こし、懐かしい一時に浸ってごらんあそばせ。貴重な二年間でしたよね。

故小野田温子さん（左から三人目）

短大十六回卒業　釘丸久子
（旧姓　市川）

ジェンダー平等はまず意識改革から

世界経済フォーラム（WEF）は二〇〇六年からほぼ毎年、世界各国の男女平等の度合いを示す「ジェンダー・ギャップ指数」を発表しています。日本の今年のランキングは一五六カ国中一二〇位。先進国の中で最低水準でした。

私は厚木市議会議員として六期二十四年間勤め、二〇一九年に引退しました。女性の地位向上、ジェンダー平等の推進のため議会内外で発言し、行動してきました。

ちなみに、厚木市議会では二十八人中女性議員は七人で、ちょうど四分の一です。公明党、共産党、立憲民主党などの組織政党出身がほとんどで、地域から女性が出にくい状態が続いています。

「ミスあつぎ」は何のため？　廃止に追い込む

私が議員になった当時は、議会の議員の呼称は「○○君」でした。本会議中に、議長が指名する時に「釘丸さん」といったので、議場は大爆笑。男は「君」、女は「さん」という観念が議長の中にあったのです。そののち、議員の呼称は男女の別なく「○○議員」となりました。

また、「ミスあつぎ」廃止にもずいぶんと時間がかかりました。

平成七年ころから、私は、「ミスあつぎ事業」はおかしいと反対してきました。

市は「ミスを選ぶ基準は、容姿を主体に選ぶのではなく、厚木にマッチした若々しい、厚木のイメージに合った方を選んでいる」との答弁を繰り返しました。私は「厚木を愛する人なら、ミスである必要はない。男性でもよい。ミスあつぎは、祭りのパレードの先頭車に乗って笑顔を振りまき、華やかさを添

える飾り物以外の何物でもない」と廃止を強く主張しました。

市は「あつぎパートナープラン」を策定し、その中で「男女共同参画社会をつくるためには、ジェンダーによる分業意識が障害になっている」と言いながら、実際には「ミスあつぎ事業」も行うという、矛盾に満ちた行政運営をしてきました。

ミスあつぎ事業は、平成十二年度に廃止されました。

言葉は人権感覚の表出

東京五輪組織委員会前会長の森喜朗氏は女性蔑視発言で辞任しましたが、記者会見では、悪いことを言ったという様子はありませんでした。

市は行政運営での表現の基準、考え方を示す冊子「表現のワナ」を刊行しました。

これをもとに、私は議会内での表現についてその都度チェックしてきました。例えば「父兄」「看護婦」などを使ったときには、休み時間に「さっき父兄って言ったでしょ」。本人は「えっ！僕、そう言いましたか？」。無意識に言っているので、間違っているという認識がありません。議員も多くいます。「あなた、父兄って言ったでしょ」というと、「父兄でいいんだ」と開き直ります。長年身に沁みついたものを直すのは時間がかかります。

だからこそ「意地悪ばあさん」よろしく、即、指摘をするのです。

言葉から人権意識を高めよう。

大学一回卒業　水野一代
（旧姓　宮田）

日々雑感

谷田の茶畑のうねりの中を登り、大学への道を急ぎます。「雪を載く富士山にスプーンを立てて食べ

たらどんなだろう。」などと楽しい空想をしながらも、さしてゆっくりとその霊峰を愛でる暇も持たず、今、思い返すと、勿体ないことをしたと、後悔する昨今です。

今の私には、もはや幻影でしかないあの富士山ですが、当時は、若い自分の未来の象徴のようにも思われ、これから先に待っている世界は、何となく清々しいものだと明るいものを背中に感じていました。

ところが、誰もがそうであるように、実際には予想だにしなかった事柄が既に連なっていて、その一つ一つを夢中で熟しながら、ここまで辿り着いたという思いです。

社会的に誇れるような活躍も特になく、平凡に家を守ってきた中で、介護の後に、次々と近親者を見送り、ふと気付くと、自身も既に充分に齢を重ねていました。

今は、リタイヤした夫と共に生業ではないけれど、季節毎の野菜を作り、朝夕、野菜たちのご機嫌を窺い、手入れに余念がありません。収穫すると、食卓にたっぷりと盛り、子ども達一家やご近所にもお裾分けし、鳥達も鮮やかな赤や黄色にトマトが熟れたのを目敏く見つけると、「待ってました！」とばかりに巧妙な技で啄んでいきます。

若い頃の私の意識の中には、畑を耕して種を蒔いたり、草刈り鎌を振り回して草を刈ったりの生活は思いも寄らないものでしたが、いつの間にか草いきれの香りを嗅ぐと、気持ちが落ち着くようになっていました。

しかし、山を見ながらの平穏な食事ができる日々をいつまで続けることができるのか、必ず来るであろう人の終焉を考えると、夫とそこに行きつくまでにはこれからどんな試練が待っているのだろうなどと、不安に陥ることも度々です。でもそれは致し方ない自然の摂理に沿った当然のことと受け止めて、今はもう一度佇まいを正して、静かに丁寧に生きることを心掛けていきたいと思っています。

この原稿を書いている最中にも、驚と、不如帰がクレッシェンドで鳴き競っています。

人間界では、コロナという災禍に頭を抱え込み、目に見えないものと戦う日々に遭遇していることを、鳥たちは知る由もないでしょうにと思いながらも、その鳴き声を聴いていると、気持ちも自然に浄化されて、人間の叡知と努力で、きっと元の生活に戻ることができるはずだと、希望が湧いてくるようです。

大学二回卒業　牛永　喜代子
（旧姓　西岡）

大学を卒業してからそろそろ五十年、友人や親族の「病気や死」という現実をそれなりに受けとめていかなければならない年齢になってしまいました。

三年程前からやっと自分のためにゆっくり時間がとれるようになったため、残る人生、好きな音楽を楽しんで暮らしていこうと思うようになりました。そんな私の生活について書いてみます。

私の楽しみ方は専門的なことや、お金をかけたりということではなくて、テレビやラジオのＦＭでの音楽番組を視たり、聴いたりという身近で気軽にできることが中心です。

昨年は「ベートーベン生誕二五〇年」ということだったので、ベートーベンの曲をたくさん聴きました。ベートーベンの人物についてのエピソードや曲の詳しい解説もいろいろあって新しい発見でした。

今年は一月一日に毎年テレビでライブ中継されるウィーンフィルの「ニューイヤーコンサート」を楽しみました。コロナのため無観客での演奏になってしまいましたが、指揮者や楽団員の皆さんの音楽への強いメッセージも伝えられて、大変感動しました。もちろん演奏がすばらしかったことは言うまでもありません。

子供の頃から音楽が好きだった私は高校・大学そ

して就職してからもずっと合唱をやってきました。結婚後は合唱から遠ざかってしまい、寂しかったのですが、近所でピアノの先生をしている人に誘ってもらって月に一度少人数で歌をうたっています。今はコロナ感染予防のため、マスクをして消毒・換気をしながらですけど、それでも結構楽しいし、いいストレス発散になります。あとはボケ防止を兼ねて、家にあるデジタルピアノを毎日少しずつ弾いています。音を小さくしてできるので、近所迷惑になる心配がなく、好きなときに弾けて楽です。

ショパンのワルツやノクターンをちゃんと弾けるようになりたいという気持になって、練習することにしました。

弾ける曲数も少しずつ増えて自分なりの達成感も味わえるようになり、今では、一人遊びを支えてくれる大切な友人（？）です。

最後に、ピアノに関するテレビ番組を二つ紹介します。

一つはアニメ「ピアノの森」です。ショパンコンクールに挑戦する若き音楽家達、そしてまわりの大人達の姿を描いたものです。ショパンのピアノ曲がたくさん演奏されて美しいアニメです。

もう一つは「街角ピアノ」です。街角や駅などに置かれたピアノをいろんな人が自由に弾いていくというものです。弾き手のコメントなどもあって、それぞれの人生模様を伺うことができます。

私なりの音楽の楽しみ方を書いてきましたが、女子大時代に合唱部で歌っていた頃がなつかしく思い出されます。

そのとき合唱した「モルダウ」や「サウンド・オブ・ミュージック」は今も記憶に残っていて大好きです。

大学三回卒業　鈴木　由美子

新しい生活

町田での新生活も三年がたち、ようやく少し落ち着いてきた。完全独立型の二世帯住宅。娘と二人のこじんまりとした快適な生活空間。同じ屋根の下、息子や孫たちのにぎやかな声も響いてくる。小さな花壇のお手入れや、朝夕静かな住宅街の散歩。桜の名所恩田川の花見、薬師池公園の紅葉も楽しみに加わった。自宅から新宿・渋谷まで一時間余で行ける便利さ。都立公園、美術館、劇場、古い庭園建築巡り。楽しい老後生活の始まり…と思いきや、まさかのコロナ禍の時代。

自粛生活の中、厚くて重いアルバム三十冊以上を整理した。これは自分の人生を振り返るよい機会となった。横浜で生まれ、三歳で清水市三保に引っ越して以来六十四年。日々悪戦苦闘しながらも、子育てと教員生活を目いっぱい楽しんできた。慣れ親しんだ静岡の地には数々の思い出がある。朝夕散歩した三保の松原。船越堤や大沢川、日本平のお花見。安倍川や興津川での川遊び。素敵な友人、たくさんの生徒、素晴らしい先生方に出会えた。　中でも静岡女子大学での四年間は特別な時間だった。大津山先生から「毎日一冊文庫本を読みなさい」と言われ、様々な本を読みあさった。大学の図書館に並んでいる『源氏物語』全巻を、注釈を頼りに読み切った。あの大学時代の「心のゆとり貯金」は、卒業後の慌ただしい四十三年間の教員生活の糧となっていたと思う。大津山先生には同窓会でお会いするたび、いつも優しい笑顔で「若い人たちから多くのエネルギーをもらえるから、できるだけ教員を続けなさい。」とお声をかけていただいた。教員生活は分刻みの忙しい毎日だったが、社会に出て働ける喜びと、児童生徒からもらえるパワーで、数々の試練をも乗

り越えられた。楽しくわかりやすい授業を目指して授業改善に取り組み、思いがけず「文部科学大臣優秀教職員表彰」まで受賞させていただいた。いつも支えてくれた家族や多くの方々に心から感謝している。

「人生は旅」…アルバムを見返すと、日本全国あちこちの美しい風景、温泉、食べ物、さまざまなエピソードが浮かんでくる。一緒に旅をしてくれた家族、親戚、職場の仲間、親しい友達に本当に「ありがとう」。海外旅行でも感じたことだが、人の暮らしはどこでも同じ。人生の終盤に知らない土地への引っ越しを決意したのも、そんな気持ちから…。今は孫三人の子守も忙しい日々。

町田の家のベッドに寝ころび、窓から見える青い空を眺めていると、自分がここにいる不思議さを思う。晴れた日の朝は洗濯物やふとんを干し、夕方それを片づける。好きな花を育て、メダカの水槽をのぞきながら、ゆっくりと豊かな今の人生を味わっている。

まずは、健康でいることへの感謝。おととし肺炎で入院してから、七十歳の年齢を実感している。お絵描き、習字、旅行。やりたいことはたくさんある。また何か新しいことを始めようかしら。

大学四回卒業　吉野　早枝子

懐かしい女子大の、同窓生の皆様へ

沼津の私立高校に八年勤めた後、縁あった転勤族の夫と各地を転々としながら、義父の介護の為一旦熊本の夫の実家へ。そこで長男を授かり、東京に転勤して次男長女を授かり五年過ごした後大阪へ。慣れないマンション生活の中、階下の部屋から生活音に対する苦情が出る等、肩身の狭い思いをしながらの二年間。義母の介護のために取り敢えず私と子供達だけ熊本へ転居となった時は、憂鬱な反面何やら

ほっとしたものです。以来通算三十五年程の熊本生活。夏の猛暑さえ無ければ、海の幸山の幸自然に恵まれ物価も安く身近には温泉も有る良いところですが、静岡県はそこに温暖さが加わるのですから数段上です。友人の父上は営林署勤めで全国渡り歩いた経験から、日本一住み易いのは静岡県と仰ったそうです。熊本地震の折りにはご心配メールやお見舞いのお品等、有り難う御座いました。本当に心強かったです。また、被災直後は情報を得る手段が断ち切られてしまったので、夜が明けてから続々届いた皆様からのメールで現状を知ることができ、隣町の甚大な被害に比べたらこの辺りは運が良かったと、心が落ち着きました。家の中を片づけ風呂桶に水を溜め子供達も出勤した後、出奔してしまった子犬の捜索を開始しようと思っていたところに、固定電話が鳴りました。仙台に住む同窓生が、息急き切った声で「ああ、通じて良かった。何度もかけたのよ…。ニュージーランドも東北も三日目に、より大きな地震が来て、大勢亡くなったんだよ。三日目が危ない！」といって切ったのです。私も慌てて出来る限りの知人に「…三日以内にもっと大きいのが…」とアレンジしてメールし、飲料水の配給所では、居合わせた皆さんに大きな声で知らせて、高い所に物を置かない、一階では寝ないと確認しあって帰宅したその晩に本震に見舞われたのです。友よ有り難う！命拾いしました。貴女のお知らせが一日遅れたら、娘は箪笥の、夫はテレビの下敷きになっておりました。三日目・四日目は市からの依頼で、校区の各町内会長・副会長（我が家）・会計の役員夫婦で炊き出しにでました。その後ボランティアの方々に替わりました。我が家の旦那寺にも五日目頃から数日間、京都の本部から若者達が炊き出しに来て、家族の夕食や実用品を頂きました。子供達の勤め先からも重宝な物資が配給され、子犬は近所の見知らぬ親子が見つけてくる等、随分助けられて乗り越えられました。半年後、暫くの間私達主婦は道ですれ違う度に

「この頃酷く忘れっぽくなったね。記憶力が劣ってしまったね。」と挨拶するようになりました。最近また各地に大きな揺れが起こってます。こんな時にこそ皆様方にお目にかかって励まし合いたいものですが、コロナ禍で残念です。お互い健康に留意して再会の日を待ちましょう。

令和三年三月二十日満開の桜の日に。

大学五回卒業　佐々木　妙后
（旧姓　前田）

卒業後のこと

令和二年　正月

「おじいちゃん、おばあちゃん、またね。バイバーイ」

「気を付けてね。又、春休みに来てね。」

この時には、これから一年以上も子供達、孫達に会えなくなるとは夢にも思っていませんでした。コロナ禍、想像もつかない事が、次から次へと出て来て、私達も振り回されました。今まで当たり前のように出来ていた事が難しくなる。信じられない事です。

私自身、そろそろ終活という言葉が、頭の中を過る歳となりました。

小学生の頃には、将来は教師になりたい。その為には大学に行かなければと思い、そして縁があったのが静岡女子大です。ただ、入学してすぐに他の人が自分より皆優秀で才能があることに気づきました。それでいて勉学に懸命に取り組むという事もなく過ごしたのですから、教員採用試験には、当然、落ちてしまいました。

卒業はしたものの、という状態でした。縁あって結婚をして専業主婦だったのですが、夫が突然、会社を辞めて起業したのです。その時、上の子が小学一年生、二番目が幼稚園三番目が二歳だったのですが、結局、私も手伝わなくてはならなくなり、現在に至っています。私のいる尾道では、他所から来た

人を「旅の人」と言います。私達は「旅の人」そのものでした。でも良い方々に出会い、助けられて、続くとは思わず創めたものが、もう、三十七年。国文科を出て、商売なんて全く経験のない私でしたので、かなり、しんどかったのですが、夫と共に必死に働いてきたと思います。得意先の倒産で、売掛金が回収出来なかった事もありました。夫が癌で入院した事も、私が脳梗塞で入院した事もありましたが、今思えば、何か起こる度に「何とかなるさ」でやってきた様に思います。幸い現在は夫婦共に元気で過ごしています。

子供達には、寂しい思いをさせてしまったのですが、自立心は養われたと思っています。自分の思った生き方をして欲しいと夫婦で考え、跡を継がせる気もなく、現在は老夫婦で商売の辞め時を考える日々です。多少なりとも元気な内に、迷惑をかけずに会社を閉められたらと願うばかりです。

仕事が無くなれば、今まで出来なかった、自分の時間を自分の為に使ってみたいなと思っています。今の世の中、何が起こるか解りません。良い事も悪い事も受け止めて、生きていきたいです。

卒業して以降、同窓会等には全く協力していなかった私に、この様な機会を与えて頂き感謝の気持ちでいっぱいです。

大学七回卒業　田中静子

過ぎた日々とこれから

静岡市で生まれ育ち、静岡市で結婚生活を送っていた私が、夫の転勤で袋井市（静岡県西部）に転居したのが約二十七年前。「免許がないと袋井市で暮らすのは大変だよ。」と言われて自動車学校に通い始めたのが四十歳。初心者マークの車でスーパーの広い駐車場の隅に駐車して買い物したのも懐かしい思い出です。それから二十三年。県外に進学した三

人の子どもが独立し、やれやれ、と思った矢先に静岡市に住む姑が突然死。十年勤めた学校図書館サポーターの職を辞する直前の事で、とにかく青天の霹靂でした。その後、静岡市で一人暮らす舅をサポートする為、週末に袋井市と静岡を往復する事になりました。ところが二十三年間の別居で、お互いの生活パターンは大きく変わり、食事の好みも異なり、認知症を自覚していない本人と、認知症の認識をあまり持たない私たちとのギャップは大きく、そのストレスが心身の不調に繋がりました。もちろん、バランスを取りながら、ちゃんと介護出来ている方も多いとは思いますが、私の場合は、そのバランスをとるのに、三年近くかかったという事です。

結局、デイサービスとヘルパーさんの助けを得ながら、週末の見守りに通いながら三年後、舅は病気で入院し、その後医師が常駐している介護施設での生活が始まりましたが、コロナ禍で面会禁止。何回かの緊急呼び出しがあった後に昨年、寿命が尽きてしまいました。その中で再認識した事は、認知症は病気であり、本人がなりたくてなった訳ではないという考え方と、困った時はプロの手を借りる、という事です。

この一年間、引越しあり、舅の葬儀あり、夫の手術・入院があり、と何やら慌ただしい日々が続きました。これからまた一年、実家の片付けに袋井―静岡の往復が始まり、落ち着かない生活が続きそうです。

ただ、この年齢になって、新たな楽しみができました。女子大時代の友人たちとの情報交換です。みんなの行動・活動に影響を受け、紹介された本を読む事で新たな世界が広がり、色々な興味が生まれてきた事がとても嬉しいです。と同時に、学生時代にもっと勉強しておけば良かった、と思う事もしばしばです。

楽しみと共に、二十三年続けてきた地元の中学校での図書館ボランティア（現在は読み聞かせ）活動

と、まだまだ活動が伴わない静岡県子ども読書アドバイザーの学習も続けながら、ボランティア仲間を講師とするアクセサリー作りや、地域で開かれる講習会にも参加していきたいと思っています。

願わくは、早くコロナが収束し、以前のように自由に出かけて、多くの人と交流・コミュニケーションがとれる世の中になって欲しい、と強く思うこの頃です。

大学八回卒業　赤井　久美子

先生の思い出

卒業してから四十余年、すっかり大学とも疎遠になって、学生時代のこともはるか昔のこととする現在、二月に大津山先生の訃報を聞いた。ふつふつと脳裏に浮かんでくるものがあった。

学生の頃、友人と共に先生のお宅に伺った折、広島の原爆慰霊碑の文言についての話題を出されたこと、卒業式後の国語科の宴席で「さとうきび畑の唄」を歌われたこと、卒業後、結婚を控えて会いに行ったこと、一人の人物を掘り下げて紹介するテレビ番組「知ってるつもり」（このようなタイトル名だったと思う）に、武者小路実篤の研究者として登場されたことなどである。

大津山国夫先生は、穏やかな人柄で、時に眼光鋭かった。温かく人を包む込む雰囲気を持ちながらも己に厳しい人のように感じられ、それは他者にも厳しいのかもしれず、他者にも自分にも甘い私たちは威圧を確かに受けていた。緊張感漂う授業であった。行儀のよい学生たちを先生はどう思っていたのだろう。物足りなさを感じていたのではないかと思ったりする。先生の望む力量に追いつかない脆弱さと楽天性とが、当時の私そのものであった。

本を読むことが好きで、将来は国語の先生になって生徒に読書の楽しさを伝えられたらいいなと思っ

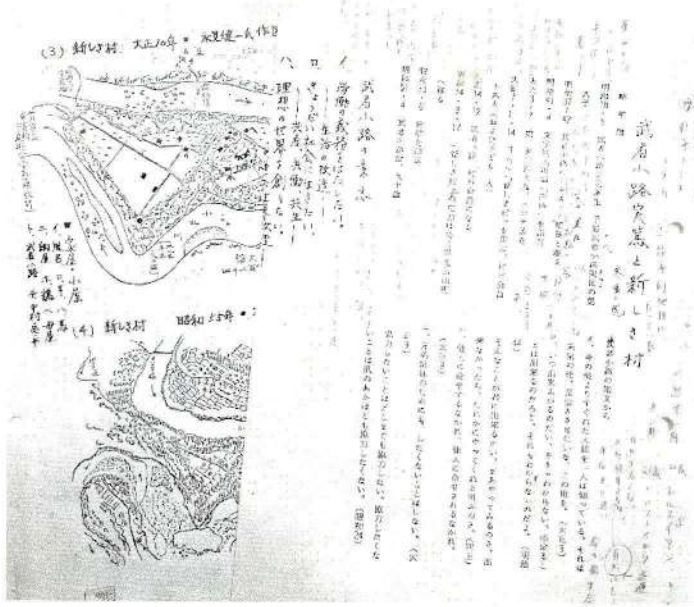
ていた私に、先生が発した言葉が印象に残った。

「一人の作家や作品を研究し続けていくと岩盤につき当たる。」

研究のあり方を講義された時であったか覚えていない。本好きで、フムフム、ヘーソーナンカ、と楽しく読んでいた私は「岩盤」につき当たった経験がなかったから、研究の厳しい一端に触れた気がした。高校時代に没頭した太宰治に心を揺り動かされたのが、ひょっとしてそれに相当するのかもしれない。

岩盤。作家と己とが対話する場所であり、作家の真実を見いだす作業場なのだろう。その仕事には、確固とした意思と感性とを必要とし、ものの見方を柔軟にしつつ、他に流されない自分を持たねばならない。そうでなければ「岩盤」につき当たることはない。自分を持つというのはそういうことなのだ。

教師になり、教材と格闘し、何をどう教え、生徒の心に訴えるものを残すにはどうすればよいかを追究したつもりの私の仕事の姿勢は、教員生活を終えた今、大津山先生の言葉の実践であったように思われる。



大津山先生「新しき村」プリント

大学十回卒業　井上明子

女子大を卒業し早いもので四十年が過ぎ、私達も六十代半ばにさしかかろうという年齢になりました。私はと言えば、卒業後に就いた事務の仕事を出産を機に退職。子供が中学生になったタイミングでパートの仕事を始め今に至るという、まさに平々凡々とした生活を送っています。

そんな私の最近のちょっとした悩み、それは三年ほど前に結婚した娘の配偶者の呼び名です。家族の間では○○さん、○○君と名前で呼ぶわけですから、何ら問題はありませんが、悩むのは他人に話す時の呼称。はて何と呼んだら良いのか。それは「娘婿」でしょ、と言われそうですが、これにはちょっと違和感があるんです。

実は私は結婚し三十余年、夫の父母と同居してきました。いわゆる「嫁」です。私にとってこの「嫁」という言葉は嫌悪感さえ抱く言葉でしかありません。夫の父母にとって、私は「うちの嫁」。嫁としての役割を求められ、淡々とそれをこなしてきました。が一方で「私は夫と結婚したのであって、家に嫁いだのではない！」という思いをずっと抱いてきた訳です。

婿も辞書には「娘の夫として家にむかえる男」とあり、嫁と同様に、いやそれ以上に「家」という昔の家族制度に根付いた言葉と感じます。嫁にも婿にもカビ臭い価値観が染み込んでいるような気がします。

時代の流れで言葉の使い方も変化するし、今は「家」から切り離して嫁、婿を使う人の方が多いのかもしれません。でも、やはり私は使いたくない。

ちょっとこだわり過ぎでしょうか。ですが生理的なものなので仕方がありません。やはり「娘の婿」と呼ぶには抵抗感が。では、何と呼べばいいのでしょう。

娘の結婚相手、つれあい、伴侶、今時の言い方でパートナー、うーん、どれもこれもしっくりこない。ちょっと堅いけど、やはり無難に「娘の夫」かなと思ったり。

迷っているので、話題になった時に焦るあまりつい「娘の婿がね」なんて口走ってしまい自己嫌悪。もやもやしてしまうことも。

何か嫁や婿に代わるいい呼称はないものでしょうか。

まだまだしばらく私の小さな悩みは続きそうです。

大学十一回卒業　山田　せつ子
（旧姓　高橋）

気高い少女

京都紫野の大徳寺の塔頭、龍光院の門をくぐったのは、松飾りが取れてまもないある冬の朝のことだった。

龍光院は、多数の文化財を有することで知られている。中でも、今では日本に三碗しか残っていない曜変天目茶碗のうちのひとつ、そして密庵席（みったんせき）と呼ばれる茶室、このふたつの国宝が名高い。残念なことに完全な非公開であり、一般の人々が訪れることはかなわない。ところが、幸運にもある知人の計らいで、その国宝の茶室を特別に見せていただけることとなった。

密庵席という名は、南宋の禅僧、密庵咸傑の墨跡を掛けた密庵床に由来する。床にその国宝の墨跡は

なかったが、張付壁とよばれる壁の絵は狩野探幽の筆によるもの、ということであった。誤って壁に傷でもつけようものなら一大事である。緊張と寒さで、身の縮まる思いであった。

拝見を終え座敷に案内されると、そこに端座しておられたのが、ご住職の小堀月浦老師であった。暖房の効いた部屋で、温顔の和尚さまから龍光院の歴史にまつわるお話を伺っていると、しばらくして黒塗りの縁高が運ばれてきた。ほんのりと温められた菓子を口に含むと、爽やかな柚子の香りが広がった。続いて熱いお薄を頂戴する。

お心づくしのもてなしにようやく緊張もほぐれたその時、和尚さまが古い裂に包まれた箱をおもむろに取り出された。じっとお手許をみつめていると、やがて現れたのは、美しい唐草模様の螺鈿細工が施された小さな天目台であった。

愛らしい姿に見惚れていると、和尚さまはその上にそっと小ぶりの茶碗を置かれた。子どものご飯茶碗ほどの小ささである。消炭色の地肌。内にも外にも鈍く銀色に輝く無数の斑点。それは、まぎれもない重要文化財の油滴天目茶碗であった。

「どうぞ手に取って」と和尚さまは勧めてくださった。しかし、十二、三世紀に大陸で生まれ、はるばる海を渡り、ここ龍光院で四百年もの間、大切に守られてきたその歴史を思うと、手が震えてとても掌にのせてみることなどできない。私は気持ちを鎮め、恐る恐る指先で茶碗に触れてみた。納戸にでもしまわれていたのであろうか、急に暖かな場に連れ出された茶碗の肌は、微かに湿り気を帯び、指先から伝わってきたのは、思いがけないほどの冷たさであった。

障子越しの冬の日差しは弱々しく、室内には明かりが灯されていた。その光を一身に集めた小さな茶碗は、異国の地にひとり静かに佇む、気高い高貴な少女のようであった。

この貴重な体験ののちしばらくして、私は長らく遠ざかっていた茶の湯の稽古に通い始めた。コロナ禍で再び中断してしまったが、災厄が一日もはやく過ぎ去り、またお茶の世界にふれる日が来ることを心待ちにしている。

大学十四回卒業　小杉　比左江
（旧姓　鈴木）

『本は一生の友だち』を掲げて

小学校の学校司書となって、十七年目に入りました。仕事内容は図書室利用に関わる全般です。中でも最も大切な仕事は、子ども達の読書意欲の向上の手助けです。読書は楽しい、次は何を読もうかなと思ってもらいたいのです。

私が小学校の頃は動物が登場する本が好きで、斎藤惇夫さんの『冒険者たち　ガンバと十五ひきの仲間』が大好きでした。ネズミ達の知恵と勇気と友情に感動し、心躍らせた思い出があります。ところが、近年の子ども達の多くは字が小さく、文字数が多い本にはなかなか手を出しません。これは由々しき問題です。如何に名作を読んでもらうかが頭を悩ます課題です。

ある年の二月半ば、六年生の男の子達が図書室にやってきました。あまり見かけない子達です。その中の一人が物語の本の辺りでウロウロしています。そのうち低学年向けの『かいけつゾロリ』の本を手に取りました。これはいけないとばかりに声をかけます。

「読みたい本が見つからなかったかな？」

「……まあ。」

「じゃあ、おすすめの本があるんだけどみてみますか？」

その子はゾロリを棚に返すとのこのこ付いて来ました。

「岡田淳さんの『選ばなかった冒険―光の石の伝説

―』なんだけど、読んだことある？」
「……まだ。」
「これね、六年生の二人が保健室に行こうと学校の階段を降りて行くんだけど、なかなかたどり着かないの。……そこからＴＶゲーム「光の石の伝説」の世界に入りこんじゃうんだよね。そして、冒険が始まるの。どう？読んでみる？」
「……じゃあ。」
と、その子は借りて行きました。（あー、あまり読書に慣れていない感じだから読み切れないかも……。いやいや、おもしろくなくて明日返しに来ちゃうかも。）翌日からその本の収まる棚をチラチラと見る日が始まりました。まだ戻ってない。今日もまだ無い。そして、今年度の返却期限の日が迫って来たある日、（あ、戻ってる。）すぐにその本を手に取りました。スピンがほんの真ん中あたりに挟んであります。（やったあ、読んでくれた。それもこんなに沢山。）

その年は六年生から先生方へ短い手紙を渡す企画がありました。『本が好きになりました。これからもいっぱい本を読みたいと思います。』こんな手紙が何通か届きました。あの子かもしれません。違うかもしれません。それでも何人かは私のモットー『本は一生の友だち』を感じ取ってくれたようです。この仕事に出会えて良かったと思える瞬間です。

どうか彼の男子にあの本の続きが読みたいと思う日が来ますように。いや絶対に来ると信じて、これからも日々本と向き合い、子ども達と向き合っていきたいと思っています。

大学十五回卒業　西藤正江（旧姓　小野）

先日、部屋の片づけをしていたところ、懐かしい本が出てきました。タイトルは「草森寮の乙女たち」著者は前島悦子さん。当時、三十代のわたしは、同窓生の誰かからの情報で、初版本を購入しました。多分、草森寮に住んでいたことのある同窓生からの情報だったと思います。改めて読んでみると、ちょうどわたしたちが住んでいたころのことをモチーフに書かれている小説でしたので、初めて読んだ時の、ニヤニヤしたり、気恥ずかしかったり、共感することがたくさんあったことを思い出しました。

静岡女子大学の学生たちが大勢住んでいた草薙にあった草森寮と古庄にあった明徳寮。静岡女子大の学生向けの格安で安心して住める場所として、紹介されたと記憶しています。

大学が決まって、住むところを探したときに、確か母の勧めもあって、わたしは古庄の明徳寮に四年間お世話になりました。

決め手は、静鉄の沿線で静岡の駅前にも出やすいこと。当時草森寮を選択しなかったのは、バイトする気満々だったので、そういう立地も念頭に選択していました。また、共有部分は、お風呂とトイレと洗濯機で、小さな台所が、各部屋に備え付けられていました。小説の舞台になっている草森寮と違って、台所が共有じゃなかったことが、当時のわたしにとっては、それも大事だったようです。思えば、コンロ一つの小さな台所で、結構工夫して自炊していたなぁと懐かしくなりました。

誰かの部屋に集まって、一晩中たわいのないおしゃべりをしたり、バイト先でいただくパンやケーキをみんなで分けたり、実家から届いた食材を使っ

て鍋パーティー開いたり、泣いたり笑ったり過ごしてきたことが、小説を読み返すことで思い出されました。

その頃流行りのドラマに出てくるような華やかな女子大生ではなかったけど、講義をさぼって遊びに行ったり、同人誌をつくるために仲間の家で徹夜したり、単位を落として、必修と選択の時間が重なっていて、履修に四苦八苦したり、みんな青春していましたよね。

当時流行り始めたカラオケBOXにもよく出かけたりしたし、飲み会もよく行っていました。バイト代は、実はそういうところに消えていたのは、親には内緒だったのは、今だから言えることかもしれませんね。（ばれていたかもしれませんが）

とはいえ、そんな経験を頭の中の引き出しにインプットして、今のわたしが存在しているんだなぁとこの年になるとしみじみ感じます。

あの頃のわたしに、もし会うことができるなら、これから経験していくことは、やがていつかあなたの頭の中の引き出しからアウトプットできて、あなたの役に立つんだよって、伝えたいと思います。（おとなになったものですね～）（笑）

大学近くの下宿へ続く道

大学十六回卒業　岩田葉子
（旧姓　中村）

「生まれてきてよかった」と思える人生

先日ふと思い立って草薙県立美術館前の芝生広場を散策して来ました。

風が強い日でしたが、五月晴れの好日。隣接する母校のキャンパス横の道を通り抜け、美術館へ続く石畳の道へ。こもれびを浴びながら木立ちを歩いていると、「地球上の生き物はみんな、唯々与えられた命を精一杯生きているだけなんだ。」などと不意に哲学的な考えが浮かんだりして。青臭かった頃の自分が思い出されて一人で苦笑してしまいます。

卒業から三十五年。私にとって草薙の丘は懐かしい場所であると共に、多忙な日々の中で忘れてしまいがちな「自分にとって本当に大切な事って何だろう？」という根源的な問いを思い出させてくれる場所でもあります。年を重ね、若い頃よりは人生の様々な側面を理解できるようになりましたが、まだまだ未熟者。悩んだり迷ったりする時も多く、そんな時何となく足を運んでしまう場所。ある意味で、私のパワースポットかもしれません。

丘の上から遠くの山々をながめ、緑の中で深く呼吸すると自分の抱えている問題がささいな事に思えて来るので不思議です。

現在は子育てが一段落したため、介護士として高齢者施設に勤務しているのですが、歳をとるという事がどういう事なのか、深く考える機会をいただいています。年齢とともに心身両面の健康を保つ事が難しくなって行く事。身体の自由がきかなくなった時、他者から介助される事を受け入れて行かねばならない事。その中で様々な人や物事に感謝する心の尊さ。そして何より命には限りがあるのだという厳然とした事実。いままではどこか他人事であった事から、自分事として老いを捉えられるようになった

事は、今後の人生を考える上で大きな収穫となっています。

とある雑誌に載っていた言葉が心に残ったので紹介します。それは映画「男はつらいよ」の中でのワンシーンですが、寅さんの「あー生まれてきてよかったなあって思うことが、何べんかあるだろう？　そのために人間生きてんじゃねえのか。」というセリフで、私は本当にその通りだなあと思いました。

だからこそ「日々是好日」。一日一日を大切に、いろんな出来事を受け入れながら、楽しく過ごせるよう、しなやかな心身を培って行こう。そして一回でも多く「生まれてきてよかった。」と思える自身でありたいと願っております。

大学十七回卒業　伊藤享子

数年前、桜が咲く時期に京都に行った。友達との待ち合わせ場所になっている仁和寺に向かうバスの中で、乗客たちが「佐野家の桜がすばらしいらしい」と話しているのを耳にした。一般のお宅で、ガイドブックに載っていないという佐野家の桜がとても気になり、私は仁和寺の少し前のバス停で降りてみた。

人々が歩いていく方へついていくと、茅葺き屋根の母屋があり、庭には色も形もそれぞれ違う何種類もの桜が咲き誇っていた。各桜に付けられた名札を見ながら、私は、こんなにたくさんの珍しい桜をどうやって集めたのだろう、この庭の手入れは相当大変だろうなと、いろいろ考えながら、桜を堪能していた。そして、この庭を友達にも見せたいと思い、その後会った友達と一緒に、もう一度訪れた。

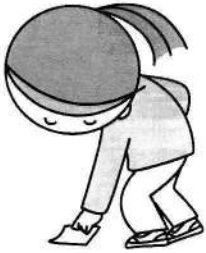
私は旅行が好きで、学生の頃からあちこちへ出か

とした姿から活発な少女へと戻り、今度は彼女が私に質問攻めです。

「ねえ、ここには『特命捜査係』ってあるの？」「『特命捜査係の○下さん』って本当にいるの？」から始まり（ご存知のかたは分かると思いますが、『特命捜査係』や『○下さん』はＴＶ番組の主人公刑事の所属や名前です。）私が○下さんは他の警察官から邪魔だって言われているけどといってみると、「○下さんは最後には犯人を捕まえるからいいの。格好いいもん！」「わたし、大人になったら警察官になりたいな。」警察官の胸についている階級章にも興味津々です。「あのバッチ、キラキラしていて格好いい！」「犯人を逮捕するように短距離も、マラソンも頑張るからね！」という意気込みもみせてくれます。

おしゃべりしている間に拾得物件預り書が出来上がりました。警察官が少女に内容を説明し、正式に落し物受理手続きを完了させました。少女は満足した顔です。一人で落し物を届けに来庁した少女は、一枚の書類と未来の警察官の夢を持って帰っていきました。

小さなお客さん、落し物を届けてくれてありがとう。私がおばあちゃんになったとき、警察官になっているといいな。



国文科同窓会だより

会　計　報　告

平成30年4月1日～令和3年3月31日

1. 収入の部

繰越	1,247,176
年会費	729,000
預金利息	16
計	1,976,192

2. 支出の部

幹事会費	41,454
通信費	217,483
印刷費	539,133
文学散歩費	46,631
文具費	216
雑費	29,285
計	874,202

3. 残　高

1,976,192 － 874,202 ＝ 1,101,990

上記の通り報告いたします。
令和3年3月31日

世話人会　西脇　里美　㊞
会計係　三浦　育美　㊞
会計監査　佐藤　容子　㊞
〃　瀧浪　恵子　㊞

国文科同窓会費納入のお願い

3年毎の『会報』発行や文学散歩などの国文科事業費として、ご協力いただける方は、同封の払込取扱票にてご納入くださるようお願いいたします。

(3,000円～)

《同窓会世話人》

杉山　雍子（短13）
西脇　里美（大1）
萩倉　あおい（大4）
山本　千秋（大5）
井上　明子（大10）
三浦　育美（大14）
阿部　よしみ（大15）

《おおとり会理事》

大学　西脇　里美
加藤　久江
萩倉　あおい
山本　千秋
瀧浪　恵子
井上　明子

国文科事業

第8回「おしゃべり喫茶」―静岡再発見―のお知らせ

私ども国文科同窓会では、三年毎に茶話会や文学散歩を行い、会員相互の親睦をはかっています。令和元年には、文学散歩「沼津を歩く」を催し、約37名のご参加を頂きました。誠にありがとうございました。

当日、沼津千本浜公園では、「沼津牧水祭」が行われ活況を呈していました。園内にある多くの文学碑や歌碑を巡り、「牧水記念館」等も訪れました。

お昼には、沼津港グルメを楽しみ、午後は自由参加で沼津御用邸記念公園を訪れました。当地では、思いがけず、沼津にお住いの中田修先生（英語）がお見えくださいました。

次回は、文学散歩「静岡再発見」です。静岡は主に戦国時代から明治時代にかけ、今川氏や徳川氏の居地として、数多くの貴重な史跡が残されています。特に駿河國総社として、歴代幕府の崇敬を受けてきた静岡浅間神社では、平成25年よりの整備事業に伴い広壮な社殿群が鮮やかに甦り〝東海の日光〟と呼ばれるにふさわしい姿となりました。文学散歩では〝おせんげんさま〟を中心に今川氏や徳川氏の史跡を訪れます。

お時間のある方は、昼食後は久しぶりに学生時代に戻って静岡市中心街の呉服町ブラはいかがですか。

興味のある方は、各クラス幹事様に申込みくだされば、後ほどご案内さしあげます。

―文学散歩「静岡再発見」―

1、実施時期　2022年5月29日（日）

2、内　容　駿河國総社として、歴代幕府の崇敬を受けて、〝おせんげんさま〟と呼ばれる静岡浅間神社を中心に、近くにある今川氏や徳川氏の歴史遺跡を巡ります。

3、集　合　静岡駅北口タクシー乗場　9時

4、散策コース予定

静岡駅北口 →（タクシー） 富春院 →（徒歩） 静岡浅間神社 →（徒歩） 昼食

5、参加費　3500円程度

※集合場所までと解散後の費用は別途となります。

第7回「おしゃべり喫茶」―沼津文学散歩―

文学散歩「沼津を歩く」に参加して

大学三回卒業　道家　由紀子
（旧姓　柏）

「文学散歩」、なんという甘い響きでしょう。でも、昨今の健康ブームと成果主義に、「文学のための散歩」はもはや死語に近い状態。世話人の方々に感謝しながらも、私も今回が初めての参加でした。しかも、不謹慎なことに、私達三回生四人は自分達の同窓会の相談で集まる、そのついでに参加しよう、という為体さ。そんな不純な動機なので、何の期待も下調べもせず、ただ当日の天気のみを心配するいいかげんさでした。

当日十月二十日、見事なる晴天。次々と集まること集まること、沼津駅頭に総勢三十四名。その溌剌たる雰囲気に（おう）と感動。どうも根が単純なせいか、よし私も頑張ろうと勝手に気分が盛り上がっていきます。早速受付をし、世話人さん達から手作りの資料を頂いて、タクシーに分乗。最初の見学先「千本浜公園」に向かいました。

ちょうどこの日は期せずして「沼津牧水祭」の日に当たり、公園では関係者の方々が大勢集まられ、準備に慌ただしい雰囲気。その間を縫っての散策になります。でも、公園内には予想以上に多くの句碑歌碑が有り、その数の多さに圧倒されながら、その質の高さ歴史の重みに魅せられていきました。

特に「井上靖文学碑」の前では、友の感想に「私も！」と相槌を打ったり、「あれ、あったよね。」と思い出したりと、まるで学生時代にタイムスリップしたかのような会話。文学を語り合う自然さ。北原白秋作詞の子守歌「この子のかわいさ」の歌碑の前では、石に刻まれている楽譜を見ながら皆で口遊んだりハミングしたり。次第に気分は高揚し、心は文学部国文学科となって、学びの懐かしさ楽しさが静かにそしてふつふつと胸に湧き上がって来るようでした。

こうして、この日は更に「若山牧水記念館」「港口公園」見学と続き、昼食、自由タイム。最後の「御用邸」見学は希望者のみで、解散！なんと充実した内容の一日だったでしょうか。世話人役の皆様、企画立案下見と、本当に有難うございました。この後、心弾む昔の女子大生四人は、駅近の喫茶店で同窓会の相談。勿論、バッチリです。

（追記……同窓会はコロナ禍のため延期に）

千本浜公園の歌碑（若山牧水）

「沼津文学散歩」参加者（若山牧水記念館にて）

恩師住所録

氏名	郵便番号	住所
田中佩刀		
吉田金彦		
三木紀人		
原口裕		
池上洵一		
井上敏幸		
復本一郎		
今西祐一郎		
矢野準		
関森勝夫		
鷲山茂雄		
須賀一好		
故 横山英		
故 中川芳雄		
故 岸得蔵		
故 吉田熙生		
故 井上弘		
故 太田京子		
故 上條彰次		
故 大津山国夫		

（訃報）上條彰次先生が令和２年２月に、大津山国夫先生が令和３年２月にお亡くなりになりました。
心よりご冥福をお祈り申し上げます。

国文科　幹事名簿

回	名前	〒	住所	電話	人数
短7	長屋　梅子				16
8	飯田　富子				14
9	板倉　雅子				15
10	佐藤　容子				24
11	山田　武子				22
12	春田　みね子				28
13	杉山　雍子				28
14	福島　佳子				31
15	井上　耀子				37
16	山下　和子				30
大1	西脇　里美				39
2	加藤　久江				17
3	道家　由紀子				30
4	大塚　一恵				40
5	山本　千秋				37
6	大村　みさ子				35
7	武田　鈴代				34
8	瀧浪　恵子				31
9	宮崎　靖子				38
10	井上　明子				33
11	福石　妙子				41
12	尾崎　裕子				35
13	杉山　ひろ子				34
14	望月　嘉栄子				33
15	阿部　よしみ				32
16	里　美香				42
17	伊藤　享子				39
18	塚本　淑子				30
19	並木　陽子				36
20	堀田　薫				32
				合計人数	933

編集後記

昨年来の新型コロナウイルス蔓延という未曾有の事態に、不安や心配を拭う事のできない毎日ですが、国文科の皆様、いかがお過ごしでしょうか。

国文科「会報」十号を皆様方の元にお送りいたします。本冊子も今回で十号を数え、不十分な仕上がりではありますが、継続の有難さを感じ、これも皆様方のご協力の賜物と考えております。また今号も原稿をお願いした先生方、会員の皆様方におかれましては、ご多忙中にもかかわらず送付頂き本当にありがとうございました。

先生方の玉稿には、一瞬のうちに私達を学生に戻してしまう有難い言葉が秘められ嬉しく背筋が伸び、また会員の方々のお便りには沢山の励みと同窓のぬくもりを感じられるものと思います。

しかしながら、今号で上條先生、大津山先生のご逝去をお知らせしなくてはならず、大変悲しく誠に残念な次第です。多くの方が両先生のご尊顔やお声を懐かしみ、数多の思い出をお持ちのことでしょう。謹んでご冥福をお祈りしたいと思います。

相変わらず試行錯誤の編集ですが、ご意見ご提案等ございましたら是非ともお寄せいただきたくお願い申し上げます。（は）

編集委員
阿部よしみ　井上　明子　杉山　雍子
西脇　里美　萩倉あおい　三浦　育美
山本　千秋

会　報
令和3年10月31日
編集・発行
静岡女子短大・大学国文学科同窓会
印刷　篠原印刷所